

# 人生85年時代に 向けたリ・デザイン より豊かな長寿社会の実現に向けて



生活研究部門・ジェロントロジーフォーラム 前田 展弘  
maeda@nli-research.co.jp

## 1—はじめに

厚生労働省主導で2007年12月より開催されてきた有識者会議「人生85年ビジョン懇談会」の報告書「人生85年時代に向けたリ・デザイン」がこのたび発表された（2008年5月）。

本報告書は、平均寿命の伸長により人生85年時代を迎えた現在、これまでの暮らし方、働き方、人生設計のあり方が時代に合わなくなり始めてきたとの課題認識のもと、人生85年時代に相応しいこれからの国民の「人生設計のあり方」および「それを支える社会の仕組みづくり」について幅広い視野から検討し、広く国民および社会に対し提言を行ったものである。今後、様々な政策会議の場面やメディアにおける啓発場面等で、本報告書は積極的に活用・アピールされることとなっており、目にする機会も増えると予想される。

本稿は、本報告書にとりまとめられたビジョン（提言）をより明快にした上で、ビジョンが描く近未来に向けて、個人・民間企業・社会他が取るべき対応を考察する。

## 2—人生85年ビジョン （人生85年時代に向けたリ・デザインの概要）

### 1 | 本ビジョンの概要他

ビジョンには、人生85年時代に資する国民の暮らし方・働き方・人生設計のあり方について、幅広い視点およびメッセージが込められている。その内容は、現実的な課題解決が求められるものから、理想的なあり方を描いたと受け止められるものまでである。論調は個人に対して直接投げかけるというよりは、社会の制度・価値観の変革、国民意識の醸成を促すスタイルである。

ビジョンは最終的に「人生85年時代に向けたリ・デザイン（提言）」（図表-1参照）という形でまとめられている。しかし、この文言だけをみただけではもしかするとビジョンに込められた主張・論旨が伝わらない可能性がある。一方で、ビジョン全体（本文）をみると、近未来の国民生活が想像される場面が少なくない。

そこで、ビジョンの紹介にあたっては、本文の構成に沿った形で、「人生85年時代とはどのような姿が理想的であるか」について端的に仮説の形で示した後、論旨を要約しながら補足した。単純な要約を示すよりは、このほうが本ビジョンの理解が明快になると考える。なお、人生85年時代の姿はそれぞれのテーマにおいて示される課題等がクリアーされることを前提としたポジティブな仮説である。また筆者の解釈のため、一部内容が飛躍している可能性がある。

### 2 | 人生85年ビジョン

#### (1) ビジョン提言主旨

この60年余りで平均寿命が約30年伸び、「人生85年時代」が到来するとともに、人々の価値観が多様化する中で、従来典型的だった「20歳前後までは学校に通い、定年までひたすら働き、

その後は年金生活で余生を過ごす」といった年齢で輪切りにする人生設計は時宜に合わなくなりつつある。

このため、国民一人ひとりが健康で充実した暮らしを送れるよう、人生設計をデザインし見直し（リ・デザイン）、仕事・生活・学び等について生涯現役の社会づくりを進め、自分らしい「花のある生き方」を実現するため提言する。

## (2) ビジョン内容

※  ビジョンの目指す姿（筆者解釈による仮説）

### 【1. 充実した人生のための基礎づくり】

#### ①生涯にわたる健康確保

人生85年時代は、健康意識が高く実際に健康な高齢者が増える。

充実した人生を送る上で生涯にわたる健康確保は、基本的かつ重要な課題である。生活習慣の改善に向けた取組み、メンタルヘルス対策の推進、スポーツ普及の推進が求められる。一方で、国民が安心できる医療の提供（医師不足問題等）、十分なケアの確保（緩和ケアを担う人材養成は急務）を行う必要がある。

#### ②生涯にわたる学習、能力開発

人生85年時代は、若い頃から高齢期を見据え精神的に自己研鑽に励む人が増える。

85年という長い人生をより有意義なものにしていくためには、自分が選択した人生設計に即し、自己研鑽や職業能力の再開発を含む広い意味での学習を主体的に行っていくことが必要である。官民連携の下、そうした学習を支援すべきである。

#### ③「死と向き合い、より良く生きるカリキュラム」の提唱

人生85年時代は、「死と向き合い、より良く生きるカリキュラム」が教育現場等で一般化する。

病院での死が一般化（約8割が医療機関で死亡）してきた結果、死に直面する機会が減って

いる。このことが近年における生老病死の自覚の不足や死生観の欠如をもたらしている。「死と向き合い、より良く生きるカリキュラム」は、自立生活の限界や命の有限性を知るきっかけとなり、今をしっかりと生きることの大切さ、さらには人のつながりの再生、崩壊の危機にある家族や地域や社会の再生の契機になると期待される。

#### ④文化を楽しむことの提唱

人生85年時代は、若い頃から文化・芸術に勤しむ人が増える。

文化的な教養は人の心を豊かにする。音楽や詩歌、絵画、ものづくりといった文化的な教養を若い時期から楽しみながら学ぶことが重要である。

#### ⑤高齢期を中心とした所得確保、経済的安定

人生85年時代は、高齢期の生活を見据え、これまで以上に現役時代から着実に資産形成に取り組む人が増える。

若い頃から蓄積した資産を高齢期にフローへ変えていくことが重要である。また高齢期も自ら働く自助の意識、また社会の支え手としての意識が大切である。

### 【2. 生き方・働き方の再設計】

#### ①大人になっていく過程での「自分づくり」

人生85年時代は、体験学習等の機会が増え、子どもと社会との距離が近づく。

人生85年時代を生き抜く基盤を形づくる上で、子どもから大人になっていく過程のキャリア教育の充実、インターンシップなど職場体験機会の提供を推進していくことが必要である。

#### ②学校から職業への円滑な移行

人生85年時代は、自らに適した職業選択がより可能になり、その職業を通じた自己実現の可能性が高まる。

将来の社会を担う若者の雇用・生活面の安定を保つことは、当該層の人生にとっても、また少子化対策や社会保障制度の持続可能性の観点

からも重要である。ニート・フリーター化している層に対しては正規雇用化を推進していく必要がある。

### ③働き盛り期における長期休暇

人生85年時代は、40代頃の長期休暇制度が定着する。

マラソン型の職業生涯においては、一定のキャリアの節目にまとまった休暇をとることが重要である（会社生活からの隠居）。

### ④いくつになっても働ける社会づくり

人生85年時代は、働く意志と能力がある限り、生涯現役で活躍できる。

働く意欲と能力がある人が希望に応じて働き続けられる「生涯現役社会」の実現は、働く人に生活の基盤となる所得をはじめ、生きがいや健康をもたらすとともに、現役世代の社会保障負担の緩和、人口減少局面における労働力の確保等にも資する。定年制のあり方についても議論を深め、一律の定年制ではなく、職業生活からの引退時期を働く人が選択できる制度づくりが期待される。「年齢で区切る考え方」をできるだけ緩め、年齢を基準としない社会づくりに向けた取組みは人生85年時代の重要課題である。さらに、関連制度において、一定年齢以上の者を一律に「高齢者」として取り扱うことも、必要に応じ適切に見直すことが必要である。

### ⑤仕事と生活のバランスの実現

人生85年時代は、多様な選択が可能で柔軟性の高い働き方が実現する。

人生85年時代は、個々の労働者が仕事と育児、介護・自己啓発・地域活動等の生活時間を、場所を含めて様々に組み合わせ、均衡の取れた人間的なリズムある働き方や生き方を実現していくことが必要である。

### ⑥持続可能な社会づくりに向けたサービスのあり方の見直し

人生85年時代は、社会全体でバランスのとれたサービスのあり方の検討が深まる。

コンビニエンスストア等の24時間営業のサービスは、消費者からみれば利便性が高いが、雇用面、環境面から見直されてくる可能性もある。

### ⑦個性に満ちた働き方の復権

人生85年時代は、個性に満ちたキャリア形成が評価・優先される。

職業選択の自由があるにも関わらず、現代の働き方は単線的で画一的な傾向がある（江戸時代は仕事本位・人間本位）。知恵が価値を創造する時代であるだけに、自らの可能性を追求できる働き方（起業や雇用の流動化）を支援していくことも重要である。

## 【3. 地域社会における共助や交流】

### ①地域社会における人のつながりの再生

人生85年時代は、地域社会における人のつながりが再生され、新たなご近所システムが創られる。

都市化と産業構造の変化の中で、地域における人のつながりは希薄化している。介護を地域で支えていく観点からも、かつて存在していた「ご近所の底力」を再生していくことが必要である。

### ②世代間の交流の舞台となる「パブリックとプライベートの中間領域」の確保

人生85年時代は、地域にパブリックとプライベートの中間領域にあたる社交空間が増える。

興味や関心に応じて世代を超えた横のつながりを強化していくことが共生社会にとって重要である。こうしたつながりのきっかけとなるのが、仕事が終わって帰宅途中に立ち寄るスポーツ施設や映画館やコンサートホール等が多い。そうしたパブリック（仕事時間・職場）とプライベート（生活時間・家庭）の中間領域にあたる社交空間を地域に拡大していくことが望まれる。

### ③年金生活者等の地方及び海外への移住

人生85年時代は、魅力ある地方都市に高齢者が移住する。

これからの高齢者（年金生活者）は比較的地価や物価の安い地方都市での生活に魅力を感じて移住（住み替え）するケースが増えると予測される。また、温暖な気候や物価の安い海外での生活を希望する高齢者も増える可能性がある。

以上のビジョンを集約し、子どもの頃から進めるべきこと、若い頃から進めるべきこと、職業人となってから進めるべきこと、知恵や経験を蓄えた者が中心となって進めるべきこととして、以下のような提言にとりまとめられている。

### 3—ビジョンに対する考察

以上のように本ビジョンは、これからの暮らし方、働き方、人生設計のあり方について、幅広い視野からの視点・メッセージが込められている。

全体から受け取られる印象としては、交流や支

え合いといった言葉が散見されるように、人と人とのつながりの必要性が強調されていることが挙げられる。今日的に人間関係の希薄さが叫ばれるなかで、その関係性の再生を人生設計の見直しを通じて行っていく必要性の意図が汲み取れる。同時に、人間関係の再生をはかっていく上でも、働き方の面でのゆとりの確保が必要であり、企業の取組みに対する期待が感じ取れる。

内容もさることながら、本ビジョンの意義を次の3点から述べておきたい。

### 1 | 社会構造乖離の打開

一つは、本懇談会の課題認識にある「これまでの暮らし方、働き方、人生設計のあり方が時代に合わなくなり始めてきた」ということ、つまり社会の制度と生活者の実態が乖離している事象を率直に受け止め、公の場で検討がなされたことは意義深い。

定年制の問題が象徴的であるが、心身ともに健

【図表-1】「人生85年時代」に向けたリ・デザインの提言

#### 【提言①】

- 子どもの頃から、文化を学び、他者に支えられていることを学びながら「自分づくり」に励む
  - ・音楽・詩歌・絵画・ものづくり・生活文化などの広い意味での芸術・文化を楽しむ学ぶ機会づくり
  - ・ふれあい授業、課外活動、インターンシップ等による体験的な学びを通じた自らの方向性を模索する機会の確保
  - ・学校教育や地域活動、企業の社会的貢献活動等において、老いや病や死に直面している人々のケアに参加するなど「死と向き合い、より良く生きるカリキュラム」の普及等

#### 【提言②】

- 若い頃から、何度でも学び、性別や年齢にかかわらず働き、世代を超えて交流する
  - ・一生の間に何度でも学び直すことができる環境整備
  - ・性別や年齢で区切ることのない採用から退職までの雇用システムづくり
  - ・正社員を希望するフリーター等に対する強力な支援を通じた雇用や生活の安定
  - ・文化芸術活動やスポーツなど共通の関心で結ばれた人々の世代を超えた交流等

#### 【提言③】

- 仕事と生活のバランスのとれた働き方を実現し、特に女性も力を存分に発揮できるようにする
  - ・育児・介護・学び等と、職業キャリアの積み重ねとを両立しやすい柔軟な働き方の実現に向けた環境整備
  - ・長時間労働の抑制に向けた労使の取組み促進
  - ・職業キャリアの節目における長期休暇制度の普及に向けた施策の充実
  - ・年中無休の24時間営業など働き方や環境に様々な影響を及ぼすサービスの見直しに向けた議論や取組み等

#### 【提言④】

- 生きる知恵や経験を活かし、人のため、「世間」のために役立つ生き方を探る
  - ・地域における芸術・文化・スポーツなど交流機会の拡大や、そうした機会を広げるまちづくり
  - ・老いや介護の問題にも配慮した多様な住まいづくり
  - ・希望する者が最期を地域さらには自宅で迎えられるようにする支え合いの仕組みづくり
  - ・子育て・教育・環境等の分野における地域貢献活動への様々な世代の住民参加、住民・企業・地方自治体および国など様々な関係者の協働促進等

康で就労が可能であるにもかかわらず、制度により労働者の生活スタイルの変更が余儀なくされることは問題であり、実態と乖離とした事象である。過年度からの高齢者雇用安定法改正等により着実に改善が進んできてはいるが、米国で定年制が廃止されてきたように、もう一段の取組みが期待される場所である。関連して、制度を年齢で輪切りにすること、高齢者という捉え方についても実態との乖離が大きいと考えられ、その点についても言及されていることも意義深い。“人物本位”の制度づくり、価値観の醸成がはかれることが期待される場所である。

## 2 | 長寿を素直に喜べない社会からの脱出

もう一点は、本ビジョンは人生の「長さ」が伸長したから人生設計のあり方を再考しようというだけの趣旨ではないこと、つまり社会の質的向上を企図していることが挙げられる。

周知のとおり、日本人の平均寿命は、2006年時点で、女性が85.8歳（22年連続世界1位）、男性が79.0歳（世界第2位）であり、戦後60年余りで約30年も伸びた。しかし、長寿を手放しで喜べない実態がある。先行き不透明な将来に対し不安感・閉塞感を抱いている国民も少なくないと想像される。また、年間3万人を数える自殺者、拡大する格差の問題等、社会の質的な負の要素も数多い。こうした社会の実情を踏まえ、長生きを真に喜べる社会づくりに向け、検討がなされたことは意義深いと考える。

## 3 | 社会の豊かさ論議の復活

本ビジョンは、生活者のサクセスフル・エイジングの追求、QOL（生活の質・人生の質）の向上に向けた検討結果と言える。

日本における質的豊かさ追求に向けた社会的議論を振り返れば、1974年の「社会指標」の策定、1986年の「国民生活指標」の策定、1992年

の「豊かさ指標」＝「新国民生活指標」の策定場面が想起される。新国民生活指標は、「生活」を住む・費やす・働く・育てる・癒す・遊ぶ・学ぶ・交わるの8つの活動領域に区分し、安全・安心、公正、自由、快適の4つの評価軸で基準を設けている。しかしこれ以降、公の場面で社会の豊かさに資する総合的な議論がなされてこなかったことからすれば本ビジョンの意義は深い。今後も質的向上に向けた議論が活発化していくことが望まれる。

## 4—ビジョンの具現化に向けて

ビジョンに含まれる視点はいずれも感慨深いものであるが、重要なのはビジョンを具現化していくことである。さいごに誰がこれから何をしていくべきか、考えてみたい。

### 1 | 民間企業他

人生85年時代をより豊かにしていけるかどうかは、個人の自助努力には限界があり、その第一の担い手は民間の企業ないしはNPO等の諸団体と考える。雇用面および商品・サービスを通じたサポート面で人生85年時代に即した形でどこまで対応・提供できるかの影響が大きい。

雇用面については、ビジョンの中でも数多くの視点が組み込まれていたが、一つは定年制の問題への対応が重要である。人生設計において一番の問題は選択肢がない状況に追い込まれることと考える。働くことは所得面および生きがいにも影響を及ぼすことであり、これが突然年齢によって活躍する場が閉ざされる、他に選択肢が残されていない（僅少である）ことは確実に生活者のQOLを低下させる。高齢者雇用安定法改正への企業における対応が進められているが、その中身は定年制度廃止が2%、定年引上げが12%、継続雇用制度導入が85%である（2007年6月現在、厚生労働省）。さらに継続雇用

制度導入企業においても希望者全員を対象としているのは4割弱にすぎない。また求人場面でも高齢者には不利な状況にある。間口は管理人・清掃員・保安員等の職種が多く非常に限定的である。就業から引退する時期について聞いた調査によれば、年齢に関りなくいつまでも働いていたいと考える割合が最も高い。高齢期の活躍フィールドの拡大に向けた取組みが期待される。

[図表-2] 就業から引退する時期についての意識

		59歳以下 まで働いて いたい	64~64歳 まで働いて いたい	65~69歳 まで働いて いたい	70歳以上 まで働いて いたい	年齢にか かわりな くいつま でも働い ていたい	既に仕事 を辞めて いる
男	55~59歳	2.5%	22.5%	26.0%	2.9%	40.1%	5.0%
	60~64歳		6.7%	32.5%	4.3%	33.3%	21.6%
	65~69歳			15.7%	11.2%	30.6%	40.7%
女	55~59歳	3.3%	19.1%	13.7%	0.7%	32.6%	28.0%
	60~64歳		3.8%	17.1%	2.0%	26.6%	46.9%
	65~69歳			8.6%	4.6%	25.2%	56.5%

資料: 厚生労働省「平成16年高齢者就業実態調査」

また、商品・サービスを通じたサポートも重要である。経済財政諮問会議（2008年4月）でも取り上げられているが、今後の成長分野として「生活直轄型産業」が注目されている。具体的には、医療・健康支援、保育、介護・生活支援、教育、移動などのサービス分野が該当する。ビジョンにおいても、健康指導、自己啓発支援、生きることの教育支援、人と人との交流機会の必要性、高齢期の移住支援等の視点があつたが、こうした生活と人生を支えるサポートが今後ますます重要となっていくと考えられる。こうした人生全体をサポートするリーダーシップをどの業界・企業が担っていくか注目される。

## 2 | 教育・研究機関

人生85年時代を支えていくためには、教育・研究機関の役割も重要である。「死と向き合い、より良く生きるカリキュラム」は、ジェロントロジー教育・エイジング教育や死生学を広く浸透させていくことが有効であり、そのための教育素材開発等を行っていくことが求められる。また生活者一人ひとりのサクセスフル・エイジ

ングの追求・QOL向上に向けては、そのことを啓発する素材開発が必要であろうし、QOLを測定する指針づくりが有益と考える。当該研究の難しさ等の詳細はここでは割愛するが、多くの研究者が当該研究に携わり、着実な成果を社会に還元していくことが望まれる。

## 3 | 個人と社会および行政

生活者個人としては、目の前にある現実（生活）に追われ、なかなか人生全体を設計する機会も少ないのが実情であろうし、設計自体も容易でないかもしれない。そうした意味でも、少数の集団から国民全体に至るまで、社会の豊かさ（生活者のQOL向上）に関する国民的議論を活発化させていくことが重要と考える。

また当然ながら行政も、本ビジョンを実現すべく、積極的な国民および市場に対する働きかけ、民間の円滑な活動を促す規制緩和等、様々な対応・取組みが求められる。担うべき役割は大きい。

## 5——さいごに

本ビジョンの冒頭には、「人は命に限りがあることを自覚するとき、命をいとおしみ、今を生きることを意味を深く感得する。自らの命がやがて消えていくことに思いをめぐらす人は、おごることなく謙虚さを保ち、社会の中で他者と支え合うことを大切に、他者の役に立つ生を送る。影によって光が際立つように、命の有限性を自覚することによって一回限りの人生は輝きと奥行きを増す」とある。人生85年という長い時間の獲得が可能となつたいま、改めてその“質”の向上が問われている。“たった一度の人生”を自らがどのように演出し創造していくか、一人ひとりが考え直し、人生のリ・デザインをはかっていくことが望まれる。